

データ複合型論文における統計資料および事例の解釈部分の構造と表現 農業経済/漁業経済分野の論文を例に

著者	大島 弥生
雑誌名	専門日本語教育研究
号	18
ページ	29-36
発行年	2016
権利	Posted with approval of The Society for Technical Japanese Education
科学研究費研究課題	人文・社会科学系論文での引用・解釈構造解明と論文作成支援のための教材化
研究課題番号	15K02635
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001611/

データ複合型論文における統計資料および
事例の解釈部分の構造と表現
—農業経済／漁業経済分野の論文を例に—

大島 弥生

専門日本語教育研究

第18号 別刷 (2016.12)

論文

データ複合型論文における統計資料および事例の解釈部分の構造と表現

—農業経済／漁業経済分野の論文を例に—

大島 弥生¹

本研究においては、農業経済／漁業経済分野の統計資料および事例の分析を含む〈データ複合型論文〉10編（各分野5編）を対象に、論文の構成要素を分類・抽出し、特に統計資料および調査事例に対する解釈を行っている表現の構造と文体的特徴を分析した。その結果、資料の提示とそれに対する考察、調査結果の提示とその考察の構成要素が観察され、従来の教材に示された定型的表現に加え、いくつかの表現のバリエーションが見られた。また、研究手法によっては、文章の専門性を低くするとされる文脈化言語および評価表現の使用が結果の提示箇所において多く観察され、結果の解釈が進むにつれて脱文脈化の程度が変わっていく構造がうかがえた。これらの結果から、資料および事例の提示・考察の指導においては、解釈の段階に着目させる指導の重要性が示唆された。

キーワード：アカデミック・ライティング、データ複合型論文、文脈化言語、評価表現、結果および考察

1. はじめに

1.1 学術論文の構造分析の現状

近年、佐藤ら¹⁾において、分野横断的な論文の構造分析（人文科学、社会科学、工学の3領域9分野14学会誌合計270編が対象）がなされ、15の構成要素の分析の結果、《実験／調査型》、《資料分析型》、《理論型》、《複合型》の4つの基本類型とその下位分類としての11の構造型が抽出された。それをきっかけに、これまで研究の乏しかった人文・社会科学系論文の構造・表現についての研究が進展している（山本・二通²⁾ほか）。一方、これまでの論文の構造・表現の研究では理系（とくに工学・農学など）の序論や結果と考察についての分析が多く（村岡³⁾ほか）、実験系の論文・レポートで用いられる表現については、教育的資源としてかなり共有されているといえよう。

1.2 社会科学系論文の構造分析

留学生の構成の中で多くを占める社会科学系留学生の論文においては、統計資料を用いつつ、事例の調査結果を考察するタイプが、一定程度あると考えられる。これは、後述する、佐藤ら¹⁾の「IV-i 〈データ複

合型〉」すなわち「I《実験・調査型》とII《資料分析型》が複合したもの」にあたる。この〈データ複合型〉において、資料や調査結果の解釈がどのような構造・表現を以て示されているかについては、詳しい分析が乏しい。また、解釈の構造や表現は、論文において重要な役割を果たすにもかかわらず、実験系の結果の考察の表現を除き、前掲の山本・二通²⁾までほとんど取り上げられてこなかった。

また、社会科学系の論文においては、結果のうちの有意な値のみに着目しているとは限らず、調査結果の解釈には、客観的評価のみならず主観的評価の表現も用いられていることが予想される。論文読解や執筆の指導において、「論文は客観的に書くこと」といった教条的な指示にとどまらず、書き手の分野でどのような解釈表現・評価表現^{注1)}が使用されているのかに着目させて文体的特徴への気づきを促すためにも、量的質的な考察を行うタイプの論文における解釈表現・評価表現の使用について、実態を知る必要がある。

社会科学系の実証論文においては、既存の統計資料の解釈を行いつつ、ある特定の対象に対する質的・量的調査の結果を詳述したうえで解釈するという言語行

¹ 東京海洋大学学術研究院教授

動が必要となる。研究分野によって、その対象は企業や団体、地域、個人など多様である。たとえば農林水産業を対象として社会科学的なアプローチで研究を行う場合、対象に対して実験的操作を行いつづらく、しばしば特定の地域や産業の個性を全体傾向と比較しつつ描出するため、既存の統計や資料の検討と現地調査とが組み合わされて示されることが多いと考えられる。このような特徴から、農業経済学・漁業経済学（または水産経済学）の論文には、「Ⅰ《実験・調査型》とⅡ《資料分析型》が複合し」（データ複合型）の特徴が現れやすいことが予想された。

そこで本稿においては、〈データ複合型〉論文の例としての農業経済／漁業経済分野の論文に着目し、統計等の資料の解釈と調査結果の解釈とを含む論文を抽出して、その中で解釈の構造および表現の特徴を明らかにすることを目的とした。

2. 調査の方法と対象

2. 1 調査対象の絞り込み

前掲佐藤ら¹⁾では、270編の論文の中間章を後述の15の構成要素に分類し、それらの配置から、学術論文の構造類型をⅠ～Ⅳの4分類(下位分類11)に分けた。分類は以下のとおりである。

Ⅰ《実験／調査型》（下位分類は省略）

Ⅱ《資料分析型》

Ⅱ-i 〈量的データ援用型〉資料（量）＋考察

Ⅱ-ii 〈質的データ援用型〉資料（質）＋考察

Ⅱ-iii 〈量・質データ援用型〉資料（量・質）＋考察

Ⅲ《理論型》（下位分類は省略）

Ⅳ《複合型》

Ⅳ-i 〈データ複合型〉方法＋結果＋考察＋資料＋考察
資料＋考察＋方法＋結果＋考察

Ⅳ-ii 〈理論・データ複合型〉

これらの型の中で、周知のとおり、Ⅰ《実験／調査型》、すなわちIMRAD型は、工学系・農学系論文を中心に、これまで構造や表現の研究蓄積が進んでいる。また、Ⅱ《資料分析型》のⅡ-ii〈質的データ援用型〉については、文学・社会学・経営学・歴史学の論文における資料の引用と解釈の構造に焦点を当てて、山本・二通²⁾が詳細な分析を行っている。しかしながら、社

会科学系のなかで一定の数を占めると考えられるⅣ《複合型》については、大島⁴⁾の分析対象の一部に含まれているのみであって、これまで詳細な分析が乏しい。そこで本稿では、佐藤ら¹⁾の「Ⅳ《複合型》Ⅳ-i〈データ複合型〉（上記一覧の二重下線部分）」に当たる論文を取り上げる。

佐藤ら¹⁾は、「筆者が当該論文の研究で行なった実験／調査の結果を提示している場合」は「結果（量的データ）の提示」または「結果（質的データ）の提示」と認定し、「既存の統計資料を用いている場合」は「資料（量的データ）の提示」、「一次資料としての文字資料、図版資料などを用いている場合」は「資料（質的データ）の提示」と認定している。「資料の提示」とその「考察」部分は論文筆者自身の手に依らない既存の大規模統計や歴史的経緯の記述などであり、「結果の提示」とその「考察」部分は論文筆者自身が行った調査のオリジナルデータとみなせる。

2. 2 調査の対象論文

〈データ複合型〉において、資料や調査結果の解釈がどのような構造・表現を以て示されているかを知るために、CiNiiにより「農業／漁業（水産業）」と「統計／センサス」との組み合わせで原著論文の検索を行い、ヒット件数の多かった学会誌（査読あり）である『農業経済研究』『漁業経済研究』の2誌を対象として設定した。両誌の巻号の新しいものから5編ずつ、「既存の統計資料の提示」と「事例調査結果についての考察」部分を含むものを選定した（稿末に対象論文の一覧を示す）。発刊の新しい順に「農1～農5」「漁1～漁5」を論文番号として付し、【サバ加工】のように内容を端的に表すキーワードとともに示す。

2. 3 分析の方法

佐藤ら¹⁾では、270編の論文の中間章を15の構成要素（[a. 研究の対象／背景の説明]、[b. 先行研究の検討]、[c. 研究目的の提示]、[d. 研究行動の提示]、[e. 研究方法の説明]、[f. 数式の提示]、[g. 結果（量的データ）の提示]、[h. 結果（質的データ）の提示]、[i. 資料（量的データ）の提示]、[j. 資料（質的データ）の提示]、[k. 考察]、[l. 結論の提示]、[m. 提言]、[n. 研究の評価]、[o. 今後の課題の提示]）に分類した。

本研究においては、上述の構成要素を援用した。さらに、統計資料に対する考察と調査結果に対する考察部分との特徴比較を行うために、佐藤ら¹⁾の[k. 考察]について[k. 結果に対する考察][p. 資料に対する考察]の2つに細分化した。また、[f. 数式の提示]については、今回の10編には1文も現れなかったため、以降の図表等から外した。分析は文を単位とした。複文において複数の構成要素とみなせるものもあったが、文の意味においてより重点的に表していると考えられる部分によって分類した²⁾。以下では、各論文の構成要素の比率を示したのち、とくに、[i. 資料(量的データ)の提示]、[j. 資料(質的データ)の提示][p. 資料に対する考察](資料に関するこれらの3要素を図1では3種のドット網掛けで示す)、および[g. 結果(量的データ)の提示]、[h. 結果(質的データ)の提示][k. 結果に対する考察](結果に関するこれらの3要素を図1では3種の縦縞網掛けで示す)の部分に着目して分析を行う。

3. 結果と考察

3. 1 各論文の構成要素の比率

表1は、各論文における16種の構成要素の比率を、左から[h. 結果(質的データ)の提示]が多い順に並べて示したものであり、図1はそれをグラフ化したものである。表1に論文番号とともに示したnの数值は、各論文の総文数である(1論文の平均は260.7文)。

図表を[h. 結果(質的データ)の提示]の多寡によって配列したのは、この構成要素の占める割合の高さが、論文の特徴をよく示すと考えられたからである。なお、調査の手法は論文中では端的に「聞き取り調査」「ヒアリング」と呼ばれ(または調査手法の名称の言及は無く)、エスノグラフィーやグラウンデッド・セオリー・アプローチといった明確な特徴を持つ質的調査手法を用いた論文は今回の対象にはなかった。

表1および図1からわかるように、10編中6編(農5【集落営農】、漁1【漁村女性】、農4【米直販】、漁5【マダイ】、漁2【陸上作業】、農3【失業】)までは[h. 結果(質的データ)の提示]の比率が他の構成要素に比して高く、2~3割を占めている。[g. 結果(量的データ)の提示]も一定量を占め、農2【ミカン】

では質的データを上回っているが、これらは収穫量・漁獲量、収入、面積、雇用者の人数といった数値データのみ言及した文であり、質的データを得た聞き取り調査と同じ調査で得られたものが大半であった。農1【メコン】は結果の提示が相対的に少なく、[p. 資料に対する考察]が多いが、これは海外調査の前提状況として資料から描出する箇所が多く必要であったためではないかと推察される。

すなわち、これら8編は、論文筆者が行った聞き取り調査の分析結果の紹介を主目的とし、調査対象となる事象・産品・地域の状況を説明するために、他者の手に依る資料(おもに大/中規模統計)をもとに論じる部分を構成要素として含むものであるといえよう。なお、[i. 資料(量的データ)の提示]がゼロの論文があるが、これは統計資料を用いていないのではなく、次節で述べるように、複文の中で前件に数値を示しつつ後件でその数値に関連する経緯等を述べているために、[j. 資料(質的データ)の提示][p. 資料に対する考察]に分類されたケースが多いためである。

一方、漁3【高齢化】と漁4【サバ加工】は、資料提示および資料に対する考察の比率が特に高い。この2編では統計資料をもとにさまざまな角度から当該テーマについて論じる部分が過半を占め、事例調査はその主張の傍証としてわずかに用いられているにすぎない。論文の位置づけとしては、より展望・論説の要素が強いものとみなせる。そこで、以下では、より典型的な「IV《複合型》IV-i〈データ複合型〉」とみなせる8編を中心に、構成要素の配列や表現の特徴について検討していきたい。

3. 2 構成要素の配列

他の研究(大島ら³⁾ほか)の結果と同様、[a. 研究の対象/背景の説明]、[b. 先行研究の検討]、[c. 研究目的の提示]は、そのほとんどが冒頭章(第1章)に現れた。[d. 研究行動の提示]、[e. 研究方法の説明]は、調査について言及された箇所、図表を紹介する箇所、メタ言語的使用などの形で、各章に現れた。

上述の8編の中間章においては、前述のようにまず調査対象となる事象・産品・地域の状況を説明するために、おもに大規模統計(『農業センサス』『漁業センサス』等)の数値を示して研究対象である事象の概

表 1 論文別の構成要素の比率

	農 5 集 落営農 n=290	漁 1 漁 村女性 n=491	農 4 米直販 n=276	漁 5 マダイ n=244	漁 2 陸 上作業 n=242	農 3 失業 n=207	農 1 メコン n=234	農 2 ミカン n=237	漁 3 高齢化 n=175	漁 4 サ バ加工 n=211
a. 対象／背景の説明	2.1%	4.7%	5.1%	4.5%	2.9%	4.8%	0.4%	3.0%	0.6%	9.0%
b. 先行研究の検討	3.4%	2.2%	8.0%	0.0%	5.4%	6.8%	6.8%	9.3%	4.0%	0.0%
c. 研究目的の提示	4.1%	0.6%	3.3%	1.2%	5.4%	9.7%	7.2%	1.3%	2.3%	0.5%
d. 研究行動の提示	3.8%	2.2%	4.0%	2.9%	3.7%	2.9%	6.0%	1.3%	8.0%	1.4%
e. 研究方法の説明	10.3%	1.4%	4.3%	2.9%	3.3%	6.3%	11.1%	5.9%	5.1%	0.0%
g. 結果（量）の提示	6.6%	12.4%	1.4%	18.0%	8.7%	8.7%	7.7%	23.2%	0.0%	0.9%
h. 結果（質）の提示	35.9%	33.4%	32.2%	31.1%	25.2%	21.7%	9.8%	4.2%	3.4%	2.8%
k. 結果に対する考察	9.0%	6.3%	5.4%	4.9%	5.8%	7.2%	8.1%	10.1%	10.9%	30.8%
i. 資料（量）の提示	0.0%	1.4%	0.7%	2.9%	0.0%	0.0%	3.8%	4.2%	7.4%	21.3%
j. 資料（質）の提示	2.4%	12.6%	9.1%	3.3%	11.2%	1.0%	6.8%	13.1%	40.6%	31.3%
p. 資料に対する考察	15.2%	13.6%	22.5%	19.7%	26.0%	21.3%	30.2%	9.7%	12.0%	1.4%
l. 結論の提示	5.2%	9.0%	2.2%	7.8%	1.7%	9.2%	1.7%	11.4%	3.4%	0.0%
m. 提言	2.1%	0.0%	0.7%	0.0%	0.8%	0.5%	0.4%	3.4%	0.6%	0.5%
n. 研究の評価	0.0%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
o. 今後の課題の提示	0.0%	0.0%	0.7%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.7%	0.0%

況を説明し、つぎに中規模な統計や経緯説明（自治体や農協・漁協等の資料等）を用いて調査地の状況を示し、そのあとに調査結果を図表とともに記述していくというのが基本的な流れであった。論文によっては、調査結果について考察する途中で再び資料に立ちもどり検討を挟むものもあった。

3. 3 資料の提示および資料に対する考察

統計資料の提示に頻出する構成要素の組み合わせと表現には、以下のものがある。典型的・特徴的と思われる表現をゴシック体太字、評価表現を波線、解釈表現を斜体、状況を名付けたような名詞句を□で示す（評価・解釈表現は3. 4で後述）。例1では、文番号22、23で[i.資料（量的データ）の提示]、24で[p.資料に対する考察]、25でもデータを提示し、26で評価表現を用いつつ解釈を行い、考察を示している。

例1：漁5【マダイ】

22 三重県は1994年と比較して2006年の収穫量は約1.5倍、小割養殖面積も同様に約1.5倍となっており、確かに養殖規模拡大は全国的動向と同様に進展してはいる。

23 しかし、2006年の収穫量は7県中最低であり、小割養

殖面積も県全体の収穫量が三重県の7割程度である高知県とほぼ同じ水準である。

24 このように三重県の養殖マダイ経営の小規模性はきわだっている。

25 また、表には掲載していないが、2006年の1kgのマダイの魚体に成長させるのに投餌量が何倍必要かという数値で見れば、三重県の場合、4.9倍、高知県が2.8倍、（中略）香川県が2.4倍となっており、三重県の場合、餌料効率が低く、それだけ成長率も悪い。

26 すなわち他産地に比較して、三重県が置かれた養殖漁場条件の自然的豊度の劣位性が注目値する。

このように、調査地である三重県のマダイ養殖の特質について全国と比較して位置づけして解釈している。

次の例でも同様に、調査地茨城県筑西市の産品を大規模調査を通じて記述し（文番号85、86）、「NではなくN」「Nという形で」といった表現で位置づけを示し、「示唆される」「指摘できよう」といった表現で調査地選択の意図（外食米の供給地）を述べている。

例2：農4【米直販】

85 農林水産省『平成19年度 外食事業者等に対する米の

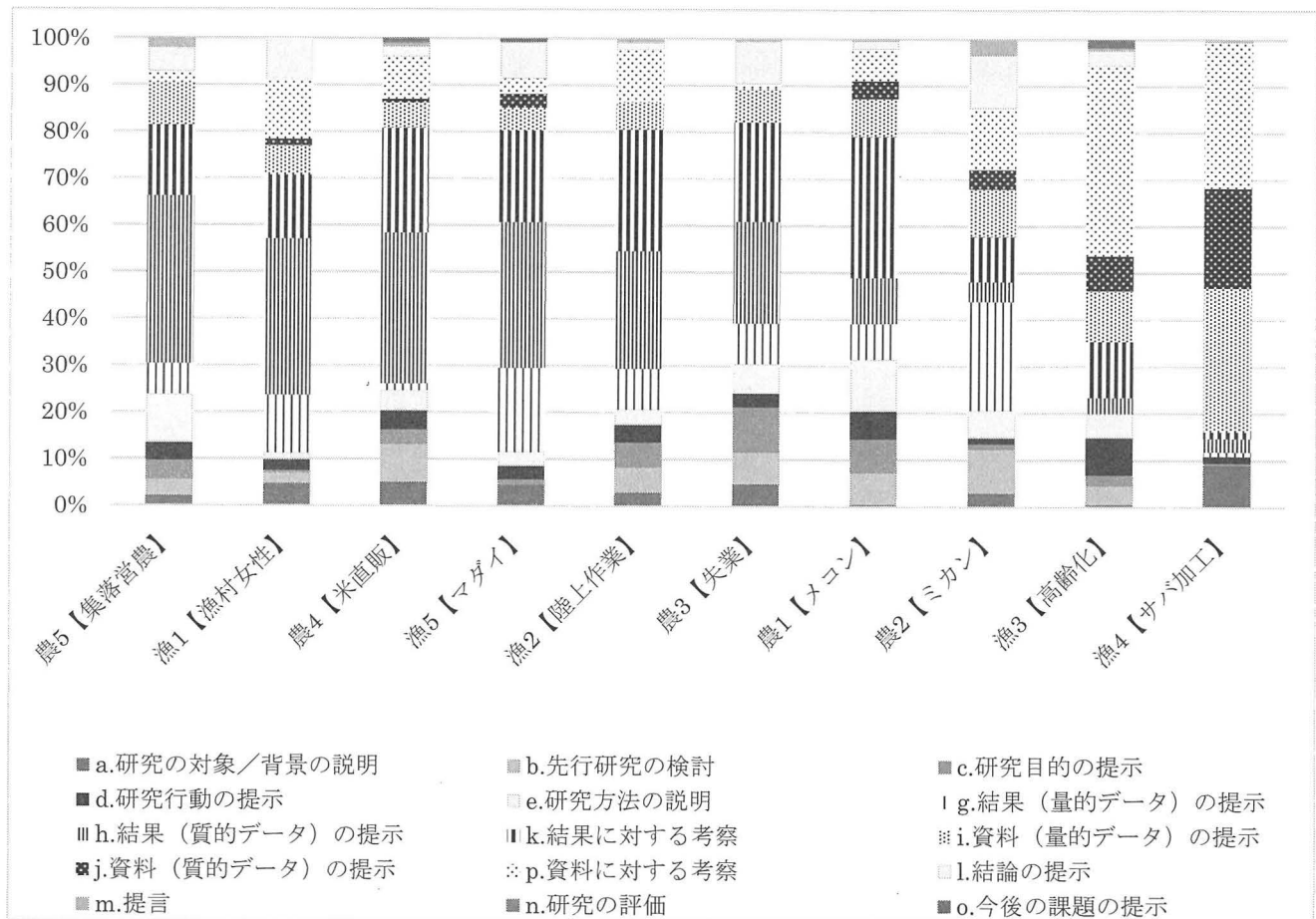


図1 論文別の構成要素の比率

仕入動向等アンケート』によると、回答 194 業者のうち 37.7% がコシヒカリを仕入れ、その中で茨城県産は 8.2% と第 4 位になっている。

86 また、ブレンド米を仕入れている 168 業者のうち 24.2%がコシヒカリを原料米として仕入れ、その中で茨城県産は 11.4%と第 3 位である。

87 茨城県における直販は「高付加価値米」ではなく、「価格を抑制しつつ業務用需要へ適応するという形」で展開する「可能性が示唆されるのである」。

88 需要構造の観点から、研究対象地域が現局面において持つ「典型的性格」が指摘できよう。

これらの例のように、大／中規模統計資料や歴史的経緯等を記した既存資料は、しばしば研究対象の位置づけの描出に用いられている。25 のように既存統計の値をある観点から換算する例も複数見られた。

3. 4 結果の提示および結果に対する考察

一方、調査結果の提示に頻出する構成要素の組み合わせと表現には、以下のようなものがある。次の例では、文番号 114～117 までに[g.結果（量的データ）の提示]、118 で[k.結果に対する考察]を行っている。

例 3：農 2【ミカン】

114 農家ごとの柑橘販売金額をみると、4,476 万円から 672 万円まで、**大きな格差がある**。

115 当然ながら、販売金額は**植栽面積と高い相関がある**。

116 成園 10 a 当たり販売金額では、2 ha 未満の農家は 55 万円/10 a 以上であり、調査農家の中で**上位に偏っている**。

117 共選農家全体では、この規模階層の単位面積当たり販売金額が他の階層と比べて、**特に高くはない**。

118 この階層には、兼業農家や高齢農家など**農業労働力が低い弱体化した農家**も多いとみられ、調査農家のように専業的農家で農業労働力が充実している農家では、**限られた面積で集約的な栽培管理**ができ、単位面積当たりで**高い収益を**実現できていると考えられる。

単純な数値の提示は 116 の「～であり」で示されるが、複文の後件で「上位に偏っている」のように数値の解釈も同時に示される文が多い。数値の解釈を示す形容詞（例：117「高くはない」）や状況を名付けたような名詞句（□で示したもの）も多く観察された。

では、経緯や状況などの質的データを中心にした調査の結果はどのような特徴・構造を持つのだろうか。

次例では、聞き取り対象の事例（434～437）のような詳述を数例繰り返した後、小括的考察が行われる。

例4：漁1【漁村女性】

434 長男（既婚、妻は大阪出身）は神島内でまき網の乗組員として漁業に従事している。

435 親は「無理やり神島の外へ出した」のだが、本人は漁業をやりたいという希望が強く、商校卒業後1年間愛知県に就職したのちUターンした。

436 夫は中学校卒業と同時に船引網漁船の乗組員となったが、1978年に（中略）自営漁業に新規に着業した。

437 当時は、世襲制のタコソボと刺網との結びつきが強く、新規参入は困難であったという。（以下56文省略）

493 第二に、こうした漁労作業部面での妻の役割は、（中略）「陸上作業の補助」といった一般的に漁家の妻が従事しているとされる範囲を超えて、現在では海上での漁具の投下・回収作業など、男性並みに体力・技術が要求される仕事を担っていることが明らかとなった。

494 また、海上労働に加えて、夏季は潜水漁業を行うことも多く、（中略）、一日当たりの労働時間が非常に長く、労働強度も高いものとなっている。

495 このように漁業経営の縮小化は、他産業への就労機会がほとんど存在しない神島のような離島において、妻の労働力も海上での漁労作業の基幹的位置を占めつつある。

496 第三に、こうした現状の下で、かつてのようなUターンによって漁家子弟が家業の後継者となるインセンティブは働きづらく、事例で見たように親が子に「島外に出ることをすすめる」といったことも生じている。

497 このような状況下で、後継者を確保できない漁家経営が増加し、全体として経営者の高齢化が進行している。

聞き取り対象の状況や行為を質的データとして示した箇所（434～437）では、調査対象者を主語とした行為や意向のきわめて具体的な描写が繰り返されており、語彙も多様で定型表現は抽出しづらい。注目すべきは、他者の思考・意向・認識についても435や例5の171「営農意欲を持った」のような断定が頻出し、437「という」のような伝聞表現が少ないことである。

このような調査事例の状況の詳述が繰り返されたのち、小括的考察の箇所（493～497）では、いわゆる判明事項をまとめる表現（「第nに、～ことが明らかとなった」「～となっている」）が現れた。また、状

況を包括的に示す「～も生じている」「～が進行している」等の表現も頻出した。

さらに、提示・考察の多くの箇所に、具体的なデータに評価表現や解釈的表現を加えながら記述した後、考察において、論文筆者がそれらのデータをどう位置づけたかを示す、より抽象的な名詞句（節）が現れた。これにより、筆者は、データを小括し、位置づけ・意味づけを行い、一種の名づけを付与しているといえる。

3. 5 表現についての特徴

提示に関し、特に量的データについては「～である／であった／であり～」「～となっている／～となっており～」が頻出した。考察においては、前述の例3の118のように「みられ」「考えられる」といった認識態度を表す動詞の受身形が頻出した。以上の結果は、農学系論文の「結果および考察」を対象とした村岡³⁾の結果とも一致する。また、これらの表現は従来の論文・レポート作成支援教材にも既に採用されているような定型的表現でもあるといえる。

一方、これらの定型表現に加え、本研究の対象論文には、いくつかの表現のバリエーションが見られた。データの提示では、「（数値）であり／～となっており」の後件に「低い／悪い／最低である」などの評価表現を伴うものが多かった。客観的な結果の記述と評価や考察とを分けて記述する自然科学系・実験系の論文と比べ、きわだった特徴となっている。事例について「～例・ケースが多くあった／見られた」等、例の多寡を示しながら提示する表現もあった。

考察では「つまり／すなわち／こうして／このように」「NではなくN／むしろN」「～のである／わけである」「～ことを意味する／～と位置づけられる」といった表現とともに筆者の捉え方が示されている表現、「～ためである／からである／による」「～がもたらされた／～が形成されている／～として機能してきた／～傾向が生まれている」等を用いて原因・影響・情勢等を考察する表現が頻出した（例5等を参照）。

例5：農3【失業】

170 また、かつての中間層農家の中には、昔からの自作をよく維持して中間層農家としてふみとどまっている例が少ない（中略）。

171 ここでも、10a前後と僅かながら借地などで農地面積

を増加させる農家がいるが、その場合には、(中略) 農外からリタイアした高齢者が帰農して営農意欲を持ったことによる(中略)。

172 こうして、第4表に総括されるように、(中略)、またかつての中間層農家がよく同一階層にふみとどまり(9戸)、さらに零細層農家へ転じた部分をそこからの上向による逆方向の補充で相殺しながら(3戸)、全体として中間層農家が増加しているのである。

173 したがって、中間層農家の増加は、一面では、(中略) 高齢就業者の増加の中で、農外就業から引退した後の高齢者が農業就業者として示す「活力」の表現であるとともに、他面では、農地の受け手となるべき上層農家が量的にも質的にも脆弱化してきていることを示していると言えよう。

また、新たな考察の開始箇所において「～の／のは～である」等の分裂構文がしばしば用いられていた。

例6：農4【米直販】

40 一方で拡大を見せているのが、「単協等直販」である。分裂構文により、考察での焦点化が読み取れる。

4. 解釈の構造と段階

4.1 文脈化言語と脱文脈化

上述したように、資料・結果の提示とそれに対する考察においては、具体的データの提示+評価表現や解釈内容を示す名詞句・節の付加+解釈内容/原因考察等の提示・焦点化+小括的な解釈(位置づけ・名づけ)というように、徐々に解釈の度合いを深め、具体から抽象へと結論に導く段階性が認められた。

佐野は、選択体系機能言語理論にもとづく修辞機能の指数を用いてテキストの専門性を捉えることができると主張し、「状況内要素<状況外要素<定言要素」の順に、また「非習慣<過去<意図<非意図<仮定<習慣・恒久」の順に文脈化言語からの脱文脈化指数が高くなるとしている(p.23)⁶⁾。脱文脈化指数は、[1]行動、[2]実況、[3]状況内回想…[12]推測、[13]説明、[14]一般化と14段階に分けられている。そして、書き手が存在する・経験した時間次元から離れ、一般性が高く恒久性のある要素に修正していくことで学習者は専門性の高い文章を執筆するための資源を習得できると指摘している(p.25)⁶⁾。

4.2 解釈の構造における脱文脈化

たしかに、メッセージの脱文脈化への着目は論文作成支援において画期的提案といえよう。特に、今回の対象のような事例分析タイプの論文では、脱文脈化指数が高ければ常に専門性が高くなるとは限らないため、その段階性に着目することが重要であろう。たとえば前章の例4：漁1【漁村女性】では、特定の人物の一時的・過去の行為が詳述され、文脈化言語が多用されている。その後、解釈の深まりの中で、より抽象的な名詞句(または節)に置き換えていくなどして、脱文脈化が段階的に進んでいることが見て取れる。

5. 結論と今後の課題

農業経済/漁業経済分野の統計資料および事例の分析を含む《複合型論文》の構成要素、特に統計資料および調査事例に対する解釈を行っている表現の構造と文体的特徴を分析した結果、資料の提示、その考察、調査結果の提示、その考察の4構成要素が観察され、全構成要素に解釈が含まれていた。また、従来から知られている定型的表現に加え、いくつかの表現のバリエーションが確認された。さらに、聞き取り調査の結果の記述などでは、文章の専門性を低くするとされる文脈化言語(佐野⁶⁾)の使用や、評価表現の使用が多く観察され、結果の解釈が進むにつれて脱文脈化が進む構造がうかがえた。これらの結果から、資料・事例の提示・考察の指導においては、データ提示から解釈の脱文脈化の段階性への着目の重要性が示唆された。

本稿では、解釈構造と評価表現の体系との関連性、二通・山本²⁾の示した文章資料の引用・解釈構造との相似性までは十分に論じられなかった。今後、分析対象を増やし、さらに検討を続けたい。

付記

本研究に際しては、学術研究基金助成金 15K02635「人文・社会科学系論文での引用・解釈構造解明と論文作成支援のための教材化」の助成を得た。

注

注1 本稿では、ある対象に対して肯定的・否定的などの書き手の態度を示す行為を評価、それを示す表現を評価表現と呼んだ。また、論文文中のある部分の持つ意味を書き手がどのように特定して理解したかを示す行為を解釈と呼び、それを示す表現を解釈表現と呼んだ。両者は排他的ではなく、解

積部分に評価表現が含まれることもありうる。「考察」は、論文の中で筆者の見解を展開する特定の部分を指す際に用いることとした。

注2 たとえば漁1【漁村女性】130「漁期間は8ヶ月間 実際の操業は月15日間程度であり、時化の時は出港しない。」は[h.結果(質的データ)の提示]としたが、前件は量的な記述ではあるが、これに付していつ出港しないかという、事例における状況の説明がなされていることから「質的」とした。つまり、量のみ提示されているものは「量」、何らかの状況や事情の説明が付加されているものは「質」とみなした。

参考文献

- 1) 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子：学術論文の構造型とその分布：人文科学・社会科学・工学270論文を対象に，日本語教育，第154号，pp.85-99，(2013)
- 2) 山本富美子・二通信子：論文の引用・解釈構造：人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究，日本語教育，第160号，pp.94-109，(2015)
- 3) 村岡貴子：農学系日本語論文における「結果および考察」の文体：文末表現と文型の分析から，日本語教育，第108号，pp.89-98 (2001)
- 4) 大島弥生：社会科学系の事例・史料にもとづく研究論文における論証の談話分析，専門日本語教育研究，第11号，pp.15-22 (2009)
- 5) 大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子・二通信子：学術論文の導入部分における展開の型分野横断的比較研究，専門日本語教育研究，第12号，pp.27-34 (2010)
- 6) 佐野大樹：選択体系機能言語理論を基底とする特定目的のための作文指導方法について—修辭ユニットの概念から見たテキストの専門性—，専門日本語教育研究，第12号，pp.19-26 (2010)

分析に使用した論文の一覧

- ・『農業経済研究』（日本農業経済学会編）
- 農1【メコン】：山崎亮一・鎌川明美：ベトナム・メコンデルタにおける土地市場の投機的な性格と農民層分解—ホウジャン省ホアアン村ホアドゥック・ポウモン集落旧地域を対象とした事例分析，第86巻第4号，pp.273-286 (2015)
- 農2【ミカン】：徳田博美：大規模ミカン経営進展産地における技術構造—静岡県三ヶ日地区を事例として，第86巻第2号，pp.52-63 (2014)
- 農3【失業】：山崎亮一：失業と農業構造—長野県宮田村の事例から，第84巻第4号，pp.203-218 (2013)
- 農4【米直販】：西川邦夫：現局面における米生産者直販の展開論理—茨城県筑西市田谷川地区の事例より，第84巻第1号，pp.15-31 (2012)
- 農5【集落営農】：金子いづみ：労働力構成の視点からみた集落営農と農業集落の構造的連関，第79巻第4号，pp.217-232 (2008)
- ・『漁業経済研究』（漁業経済学会編）
- 漁1【漁村女性】：長谷川健二・今川恵：地域労働市場と漁村女性の就業構造—福井県と三重県の2つの漁村の事例—第59巻2号，pp.23-54 (2015)
- 漁2【陸上作業】：副島久実：漁業の陸上作業労働における女性従事の特徴と変化，第59巻2号，pp.75-91 (2015)
- 漁3【高齢化】：加藤基樹：農業高齢化の実態と離農の要因—漁業との比較のために—，第58巻1号，pp.63-77 (2014)
- 漁4【サバ加工】：近藤信義：サバ加工大規模産地の供給構造と現状—東日本大震災の前と後—，第56巻1号，pp.37-50 (2012)
- 漁5【マダイ】：長谷川健二：マダイ養殖業における小経営的漁場利用と経営問題—三重県を対象に—，第55巻1号，pp.119-121 (2011)

Sentence Structure and Expressions in Interpretations of Statistical Materials and Case Studies Found in “Complex” Type Academic Papers in Agricultural/Fishery Economics

OSHIMA, Yayoi¹

¹Department of Marine Policy and Culture, Tokyo University of Marine Science and Technology

This study analyzed sentence structure and expressions used in “complex” type academic papers featuring statistical materials and case studies. Five of the papers concerned agricultural economics and five concerned fishery economics. In the section where each paper discussed the statistical materials used in a given study and the study’s results, typical expressions as are featured in composition textbooks were noted and several variations were evident. Depending on the methodology, some of the papers studied had contextualized language that reduced the technical nature of the writing while others language that increased it. In the section presenting a given study’s results, papers often had contextualized language and evaluative expressions. The degree of decontextualization changed as papers interpreted a given study’s results. These findings suggest the need for instruction with a focus on levels of interpretations when teaching how to present materials and case studies and how to discuss a study’s findings.

keywords: academic writing, “complex” type, contextualized language, evaluative expression, results and discussion